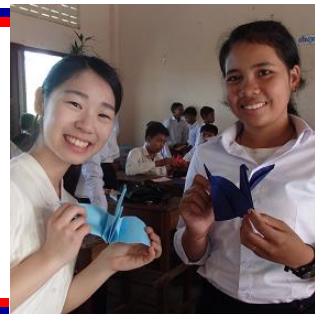


『今、浦学にできること』 in Cambodia

# カンボジア浦和学院スクールプロジェクト vol.13

សេរីអនុដរណាតិ សិស្ស ប្រាំនាក់ ដំណើរទស្សនកិច្ចកម្ពុជា

国際教養 参加生徒 9名の感想



*Urawa Gakuin High School Formal Homepage Topics*



1年 A.O. (女) 鴻巣市立赤見台中学校出身

この研修旅行に参加する前の私が思うカンボジアは発展途上国であり、暑いというものだった。またそれによって生活に不便なところがあるのではないかと、そう思っていた。孤児院に訪問すると聞いた時、私の中には緊張と少しの不安があった。孤児院こそ日本の生活とかけ離れていると思ったからだ。しかしカンボジアに行くと発展途上国で気温が暑いことは確かであったが、その環境で暮らす人々の顔は日本人と同じで生活に不満を持っているようには感じなかった。むしろ自国に誇りを持っていたように感じた。出会った人は「アンコールワットは素晴らしい」等とカンボジアの良いところを私に話してくれた。また、高校生は色々なことに興味を持っていて一見日本と変わらないようだった。だが話をする中で両親の仕事の手伝いと勉強を両立している生徒が多くみられた。ではなぜそれまでして勉強をするのか、学校に行こうと思うのだろうか。勉強する理由が一人一人に明確にあるからだ。彼らはなぜ勉強するのかという質問に「国のため」と答えた。このあと私は、自分は何のために勉強しているのだろうと心の中で問いただした。私にとって勉強をする意義は将来のためにあると思う。私のような日本人学生も何か目的があって勉強していることは同じだと思うが、自国のために勉強しているという学生はあまりいないであろう。自分たちのためか、国のためか、ここに大きな違いがあると感じた。孤児院では裸足で遊ぶ子どもたちがたくさんいた。「孤児院にはチャンスがたくさんある」そう聞いたとき孤児院に対しての私の印象は大きく変化した。孤児院に行くことで貧しい人たちが教育を受けることができる、このような活動も国の発展につながっているんだと感じた。この六日間沢山のことを感じ、貴重な体験ができた充実した研修旅行であった。そして現地で会った人々との出会いを大切にしていきたい。



1年 R.N. (女) さいたま市立美園中学校出身

訪れたシェムリアップは、アンコール遺跡群のある観光の中心地だ。中国語やハングルのプラカードを持つガイドで混雑した空港の様子からもそれがうかがえた。日本語学校を訪問した際、ほとんどの生徒の将来の夢がガイドになることだった。観光地のため、ガイドやホテルの従業員に需要があるようだ。1つ外国語を扱えれば、就職しやすくなる。また、日本で収入が安定している公務員に人気が集まるように、カンボジアも公務員が年金を支給されるようになったことで人気になりはじめた。これにより、教師の不足が改善されることが期待される。

孤児院の子どもたちは、英語、仏語、日本語を勉強し、学校にも通っている。英語と日本語で自己紹介を少しと、仏語の歌を歌ってくれた。はにかむ表情がかわいらしかった。孤児院には、ボランティアの先生がくる。10歳の女の子の夢は、一生懸命教えてくれる先生のように、教える側になってみんなに知識をあげること。自分よりももっと小さな子どもの言葉に感動した。

どの遺跡にも、ものを売る子どもたちがいた。カンボジアの子どもたちは午前か午後に学校へ通い、あとは親の手伝いや仕事をする。家族を支えていたり、楽にしてあげている。子どもたちが学校へ1日通うようになれば、生活が苦しくなってしまうだろう。各国の援助で校舎が建てられているが、校舎の増設と同様に、学習に専念できる環境づくりも必要だ。

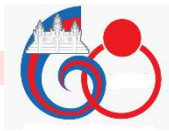
カンボジアは、日本と違い、若い人が多い国だ。これからも急速に発展を続けていく。首都プノンペンに進出する日系企業に勤めるビジネスマン、シェムリアップの観光ツアーに参加する旅行者。身近な国とはまだ呼べないが、お互いの国は知られてきている。また、カンボジアの教育に関する問題や、日本の少子高齢化問題などを自国で解決することは難しい。それゆえに、国際協力が求められている。これからの社会をつくっていく世代のひとりとして、私たちは交流を深め互いを知っていく必要がある。



### 1年 M.O. (女) 朝霞市立朝霞第四中学校出身

今回のカンボジア研修旅行では自分の視野を広げられ、また様々な観点から物事を見て、考えることができました。日本とカンボジアに違いがあるということは行く前から知っていました。しかし、行く前と行ったあとでは、その違いの捕らえ方が変わりました。また、新たな違いを知ることもできました。

私が一番印象的に残っているのは、高校のことです。日本と比べるとカンボジアの高校の設備がそこまで整っていないということは行く前調べてわかりました。しかし、設備が整っている日本の高校生よりもはるかに勉強に対しての意欲がとても高く、また、英語をスラスラと話していました。中には日本語がとても上手な子もいました。私はこの事実直面してとても恥ずかしくなりました。私達日本の高校生は設備、教科書、勉強道具などが充実しているにも関わらず勉強に対しての意欲がカンボジアの子達よりも低いと思います。私達は高校で勉強できるのがあたりまえだと思っていましたが、そうではありません。カンボジアの子達は将来、国のため、家族のために必死に勉強しています。私達が高校で勉強をするということが、どれだけ幸せであるかがよくわかりました。私は勉強に対してもっと意欲的に取り組みたいです。特に英語をたくさん勉強し、世界中の人達と関係を持ちたいです。そして、これからの社会に貢献したいです。



### 1年 S.S. (女) 草加市立瀬崎中学校出身

私の将来の夢は看護師になって日本の医療技術を、海外の医療技術の発展が乏しい国に伝えること、そしてその国の医療の発展に携わることです。私のカンボジア研修旅行に行くにあたっての目的は、カンボジアの医療の現状を自分の目で見ることでした。

私が今回拝見させていただいた病院は設立して間もなかったのもとても綺麗でした。きちんと施術ができる最小限の設備は兼ね備えている印象でした。しかし、この病院で勤務されている方のお話を伺ったところ、二つの問題点を感じました。一つ目は医療人が足りていないこと、二つ目は国民からの信用を得られていないことです。医療人が足りていないこととしては、麻酔医がいないために、外科と産婦人科が実質的に休診状態だったことと、各科に存在している医師が限りなく少なかったことです。そして国民からの信用を得られていないこととしては、もしカンボジアの人々が病気になったとしたらタイやベトナムの病院に行くと言っていたことです。

子どもたちは国のために勉強していると言っていました。そんな志があるにも関わらず、カンボジアは発展途上国と言われています。それには経済的問題など色々な問題があると思います。色々な国の支援を受けていてもまだ足りていないと思います。私は少しでもこのような国の力になりたいと今回のカンボジア研修で強く思いました。

少しでも発展途上国の現状を色々な人に伝え、貴重な体験をさせていただいたことに感謝し、今後はこの体験を生かして生活していきたいと思っています。





## 2年 A.T. (男) 伊奈町立小針中学校出身

私は今回の研修で、普段の何気ない生活がどれだけ恵まれていることか、学業に励むということの意味、カンボジアはどんな国か、また日本とのつながりについて数多くのことを学ぶことができました。カンボジアは、発展途上国と呼ばれる国であり、日本より発展が遅れている国です。

日本との違いで一番感じたのは、水道水が飲めないことです。顔を洗ったり、口をゆすいだりするには、飲料用の水を使わなければならず、とても大変でした。普段何気ない生活がどれだけ恵まれていることなのかが身をもって知ることができました。カンボジアの学生さんとの交流では、学業に励むということの意味を学びました。カンボジアの学校は電気がなかったり、冷房装置がなかったりと設備が不十分で決して充実しているとはいえませんでした。しかし、そんな環境下の中でもカンボジアの学生さん方はとても前向きでかつ勉強熱心で、誰一人勉強が嫌いという子がいませんでした。私は、なんでそんなに勉強をするのかと尋ねると「夢を叶えるために」「国のために」「将来良い生活をするために」という返事が返ってきました。私はとても驚いたのと同時に勉強に対する意識が低かった自分が恥ずかしくなりました。今後は自分の夢の実現の為に勉強をしっかりと取り組んでいきたいです。

今回の研修では、カンボジアという国を肌で感じることができました。カンボジアの人々は、優しく、フレンドリーで、一日一日を大切に生活しているという印象を持ちました。発展途上国ではありますが、自分が想像していたよりも発展が進んでおり、特に携帯電話を持っている学生さんが多くいて驚きました。また、数多くの日本人が医療現場や学校などで活躍をされており、カンボジアと日本の絆を知ることができました。今回の研修で、学んだことは、今後の人生に活かしていきたい、感じ・考えたことは自分自身から浦学生に情報を発信し、共有していきたいと思えます。



## 2年 F.A. (女) 戸田市立戸田中学校出身

私は今回の研修旅行に参加して、カンボジアの人たちの学びに対する姿勢に感銘を受けました。

学校では教室や教員の数足りてないため、午前か午後かの半日(1日4時間ほど)しか授業を受けることが出来ません。また、教室は少し暗かったりなど、とても十分とは言えない環境の中でも、みんな一生懸命に勉強に取り組んでいるのだろうと感じました。カンボジアの母国語はクメール語なのに、それと同じくらい流暢に英語を話していて驚きました。私は全然英語で話しかけることが出来なかったのもとても恥ずかしいと感じました。日本の方が勉強する環境が整っているけれど、勉強に対する熱意や想いはカンボジアの人々の方が強いと思いました。

私は空港に向かうバスの中でのガイドさんの話が一番印象的でした。「もっと勉強したい、今からでも大学や専門学校に行きたい」と、とてもキラキラした笑顔で言っていたのが忘れられません。カンボジアの人はやはり勉強に対する気持ちが強いと感じました。「日本に戻ったら、チャンスが沢山あると思うから、頑張っってね」と言われ、勉強すること、何かをするにしても全てがなにかに繋がるためのチャンスなのではないかと思いました。自分自身を成長させていくために、今まで怠けていたことなども一生懸命に取り組んでいきます。

自分自身のため、国のために勉強するという生徒がいたように、カンボジアの人々は自分たちの国をより発展させるために、より多くのことを学ぼうと努力していました。私はその姿勢を忘れずに、何事にもチャレンジしていきたいです。そして、カンボジアの今をひとりでも多くの人に伝えたいと思えます。





2年 S.S. (女) さいたま市立日進中学校出身

私は中学の頃部活動の顧問の先生からカンボジアに行ったことがある話を聞きました。その時からカンボジアとはどういふところなのかとても気になっていました。浦和学院に入学して、カンボジア研修旅行というのがあるということを知りました。一年生の時申し込もうと思いましたが、自分に自信がなく、迷っていると受付終了になってしまいました。二年生では行きたい気持ちが強くなりました。そして、二年生になって研修旅行の申し込みをして、行けるということが決まった時は本当に嬉しかったです。

1月14日 成田空港からカンボジアへはやく6時間です。初めての海外だった私にとっては長時間のフライトはとても辛かったです。カンボジアに着くとまず最初に思ったのは「暑い」ただそれだけでした。

1月15日 現地の学生と触れ合うことが多くて、カンボジアについて沢山お話してくれたり、短い時間でしたがみんなとコミュニケーションが取れて嬉しかったです。

1月16日 高校生のみんなと意見交換ができてよかったです。孤児院では最初可哀想という印象がありましたが子どもたちと触れ合っていくうちにその感情はなくなりました。とても明るく、本当に元気で遊んだ次の日筋肉痛になってしまうほどでした(笑)

1月17日 観光をしました。アンコール・トム、タプロム遺跡、アンコールワットなど、ガイドさんと一緒にまわりながら遺跡の物語などを教えていただきました。

1月18日 最終日には私たちをカンボジアに招待してくださったシン・ナム先生との対談がありました。シン・ナム先生との対談で直接お話することはありませんでしたが、現地の高校生の皆さんとはお話できました。

今回の研修旅行を通してカンボジアについてまだまだ知れなかった部分が沢山あるので、もっともっと知りたいと思いました。

そして、感じ考え行動するということがいかに大事なのかということはこの研修で理解することが出来ました。この経験を糧にこれから自分に出来ることはもっとあるのではないかとそして、自分がしなければいけないことをしっかりと、将来の夢に繋げていきたいと思いました。



2年 Y.I. (男) さいたま市立大砂土中学校出身

この研修を通して、自分が大きく成長できたことを誇らしく思う。カンボジアに行く前に本で見たネガティブな印象は全くなく、むしろ私たちの心を温かくしてくれた。寺院でポルポト政権の話聞いたときは思わず言葉に詰まった。でも、カンボジアの人達は本当に明るい。みんな、国をよくしていこうと頑張っている。英語は自分より話せているし、経済も発展している。病院や職業訓練校も充実していた。将来の夢は？と聞くと、ガイドや先生、中にはエンジニアと答える人もいた。悲惨な歴史はあったが、カンボジアの未来は明るい。10年後、いや5年後にはもっと発展しているだろう。遺跡やトレンサップ湖では観光客で活気にあふれていた。小中学校では、電気の無い教室を目の当たりにした。

早く照明がついて欲しいと思った。クロライン高校でもそう、生徒たちは本当に意欲が高い。勉強に怠惰だった過去の自分を恨みたくなくなるくらいに。私もその意欲に負けないように勉強を頑張ろうと思った。日本語センターでは、難しい日本語を流暢に話していて驚いた。会話ができればでも心が通い合う気がしたが、ゲームやダンスでもっと打ち解けることができた。また、特に印象に残ったのは、孤児院でのこと。伝統楽器を教してもらいながら、一緒に合奏したり、パワフルにサッカーをする姿に驚いたり、縄跳びでは人気者になったり。親が離れてしまった話も聞いたが、そんな暗さを思わず、むしろ私達のほうが元気を貰ってしまった。その逞しさに思わず感心していた。孤児院をでて職を貰っても、手伝いに来るそうだ。たとえ孤児でも、孤独ではないのだと感じた。

クメール語は難しく、楽しいしか言えなかったけど、言葉よりもっと心が通じる瞬間に出会えたことが、何よりも素晴らしいと思った。この研修で沢山の刺激を受けることができた。カンボジアで感じたことは、今後の自分に活かし、一人でも多くの人に伝えていきたい。



カンボジア国会議員シン・ナム氏(中央、背広の方)、その右は本学園会長理事神成裕(かなりゆたか)を囲んで、記念撮影。

団長の出崎(国際教養ライフスキル教育推進副部長/数学科教諭)は、「今回3回目の訪問となるが、私自身が学ばせてもらっている。浦学の生徒は他校にないさまざまなイベント、国際交流に参加でき幸せだと思う。参加した生徒たちは、日に日に成長し、意識も高く、能動的に行動できている。」と、浦学サミット(2月7日)でも発表された。



### 3年 A.M.(女) 越谷市立千間台中学校出身

カンボジアへ行く前、国について色々調べたが、まだ発展していない部分だとか足りない点などばかりが取り上げられていることが多く、勝手にマイナス的なイメージを持ってしまっていたと思う。だが実際にカンボジアへ行くと、人々はそれを辛いだとか悲しいだとか悲観的に捉えているのではなく、みんなで国を良くしていこうと、とても前向きで、笑顔と優しさに溢れていて、私たちがパワーをもらった。

この研修で子どもと接することが多くあったが、彼らから学んだことはたくさんあった。現地の学生は一人一人がしっかりと将来の夢を持ち、将来はこうして国を支えていきたい、自分と国のために勉強ができて嬉しい、という思いを伝えてくれた。勉強できることに感謝しているのが言われなくても伝わってきた。私たちのほうが明らかに勉強する環境は整っているのに、勉強への意欲は彼らのほうがはるかに高かった。学校に行って勉強ができることがどれだけ幸せなことか、私たちにそれが当たり前になりすぎて忘れてしまっていたと思う。カンボジアの人々の勉強できる”チャンス”があるという言葉が印象的だった。私もこの素晴らしいチャンスを最大限に生かして自分だけではなく、誰かのために働けるような人間になりたい。また、カンボジアの人々は、子どもであっても大人であっても一人一人が自分に自分の責任を持っていることが感じられた。そこが日本との大きな違いのように思う。まだ子どもだから、自分一人では、と一人の存在を軽んじるのではなく、私はこうなるんだ、私の力でこうしていくんだ、と自分の存在を肯定してもっと自信を持っていいのだと思う。自分には無限の可能性があり、それを生み出すための環境があること、そんなことをカンボジアの人々は私たちに気付かせてくれたと思う。

この研修を通して、幸せとは何かということを改めて考えさせられた。私たちは今あるものよりもないものばかりを探していたような気がする。綺麗な家に住み、最先端のものに囲まれて、当たり前のように学校へ行くことではなく、今あるものに感謝して目標に向かって努力をし、未来への希望を持つこと。それが幸せというものなのではないかと思う。このような人生においてとても大切なことを学ぶことができ、この素晴らしい機会を作っていただいた全ての方々に感謝の気持ちでいっぱいだ。研修を通して感じたこと、学んだことは浦学生だけでなくより多くの人に伝えていきたい。